

224

175

箏曲譜

初

卷

074519-000-9

224-175

箏曲譜初歩

太宰 勝之都 / 編

M39

CEI-1862



224

175

琴曲譜

初

冊

は、かき

わが國の樂器にて古來よりもてはなされしものゝうちに、最も高尚にして優
住なるは箏なり。かの十三絃が緩急の調はるはれ空澄む月にかよひ、落穂の風
にひびきて、また温雅の情を滴發し、また禮容よいなほむ。箏は一時の心
やりをりといふは天に備
西洋の樂の我が國に渡來
れ、殆んどそのあとを絶
到るところに其絶調をきく
の精神に富めるのが、
登ふに外ならざればなり。

訂正	●は正	●は誤
一 九かたくな	●は正	●は誤
一 十暗記する	●は正	●は誤
二 三最も暗記	●は正	●は誤
二 天閉にく	●は正	●は誤
二 五終すに	●は正	●は誤

誠を盡すにあるなり。
をなし、やや拙樂は之は壓制さ
り、獨律曲のみ盛大を極め、都鄙
で、他を其曲のやさしくして美
かたくななる學説と相俟て歸徳を

されど悲しきかな、箏の調は一の根幹とする長短なく、たゞ之を暗記するより
外に手段なきことなれば、學習の不便は更なる。一度は習ふことも忽に忘れ
て何の効もなきに至る。こゝに實に大に遺憾とする所なり。しかるに古曲の奏
太宰やあし、年來こゝに留意せられ、多くの苦心と經驗によりて、歌詞の愛

でたきもののみをとりて、それを譜表にうつして公にせらる、斯道のためよろこばしき極なり。
あはれ泰西の樂の歡迎せらるゝ今日に至りてもなほ盛なる箏曲がこの新生命を得たる今日、女子教育上間接に如何なる教訓を與ふるか、それ豈優雅の性情のみならんや。

丙申四月

操山人識

緒言

箏曲の世に傳はりてより日さなく夜となく唱傳せられ何くの果その聲を聞かざるはなけれど、其學習に困難にして最も譜記に力を要するより、専門にこれに従事するものすら其困難を訴へて止まず、殊に他に相當の業務ありて餘暇毎に之を習ふ人々よ於ては實に想像に餘りある苦心を要すべきは人の些かも疑はざ所なり。されは一々箏曲を譜本に寫し正確に修學者に授けなばこの勞を減ずるを得んか。年來作譜の事に従事せしも、この事たるや實に難事中の難事にして、曲譜の選擇、符號の精選等に多くの時日を要し、殊に寸暇なき身の幾何の成果をか収め得む、とかつて思ひ留りたることもありき。されど粗笨ながら一冊を編して世の批判をも乞ひ、且はこれより幾分か習者の便をも得るあらば、さてこの書を編するに至れり。故に云ふまでもなく、粗漏、不體裁、の箇所の多きは自らの確信する所にして向後の改善に力を用ふ可きは言を待たず。

殊に本集は殆ど初學用に於て、所謂免許物と稱するものは一曲も包含せず、たゞ「手ほごき物」のみなるが、其曲譜、歌詞の如き、大に選擇に選擇、熟慮に熟慮を

重ねたるものにして、在來の「手ほごき物」と大に其趣を異にす、ふれ在來のものゝ中には淫猥實に聞にく堪へず、純潔なる女子に教ふべからざるもの多ければなり。また別項にも記せる如く殊に學習に困難なる左手法、右手法等の符號を、如何に幼年なるものと雖も容易に理解し得らるゝ如く定められたれば、聊か初學子女に効果あらんを信ず。終りに監み、微力、この書を編し得たる、既に望外の幸なり。まして些かにても習學者の裨益ともなりなば、不肖の光榮、實に云ふべくも非る也。

編者識

凡例

一、本書はたゞ箏を習ふ者の便のために編す。故に譜の如きも故らに洋譜の難きに倣はず、古來のものに改良を加へて之を用ゐたり。これ琴の譜、調子は複雑にして到底洋譜の如きものにて表はすを得ず、殊に左手法の如き如何なる手段によるも到底、奏者をして直に會得せしむる能はず。これ近世稍、見る所の洋式樂譜をすてゝこの譜を採りたる所以なりとす。故に本書に於ては右手法左手法等に左の符號を附し(其名義に近似なる選び)以て稍其欠を補はんことす、即ち

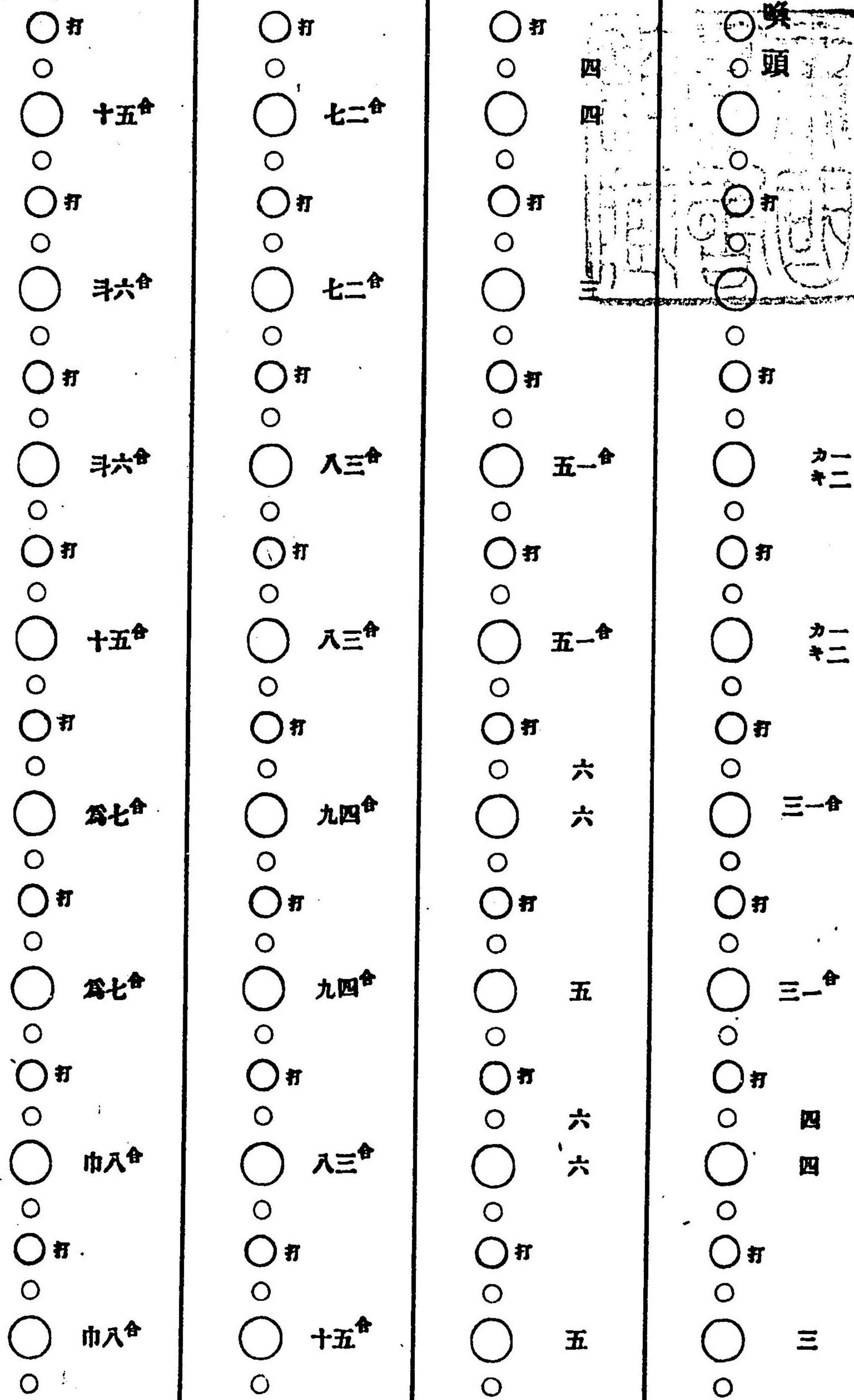
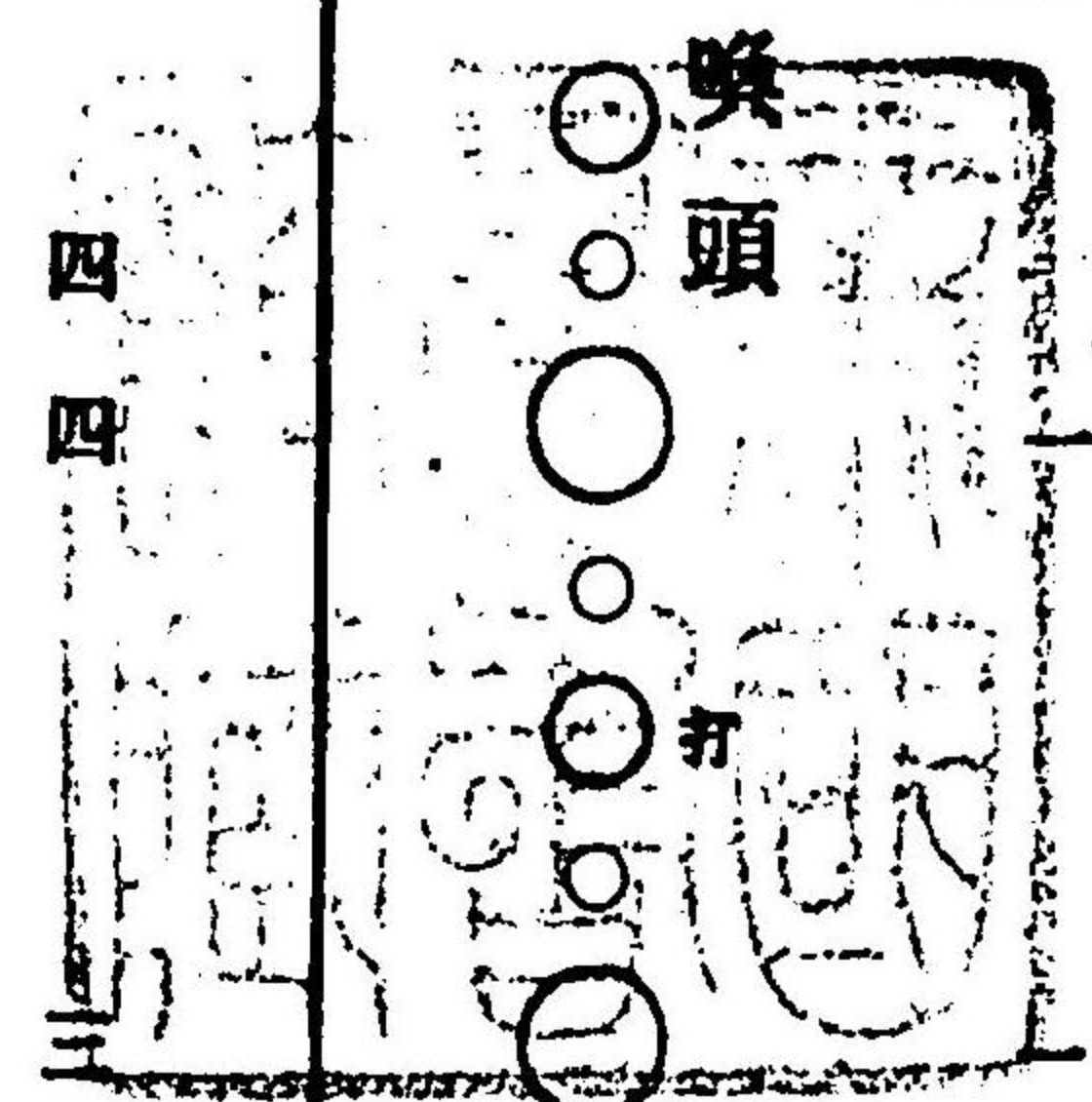
●右手法

拘爪 (ケ) 半拘 (全) 早拘 (全) 搔手 (カキ) 合爪 (合) 散爪 (散) 押合 (合) 裏連 (レ)

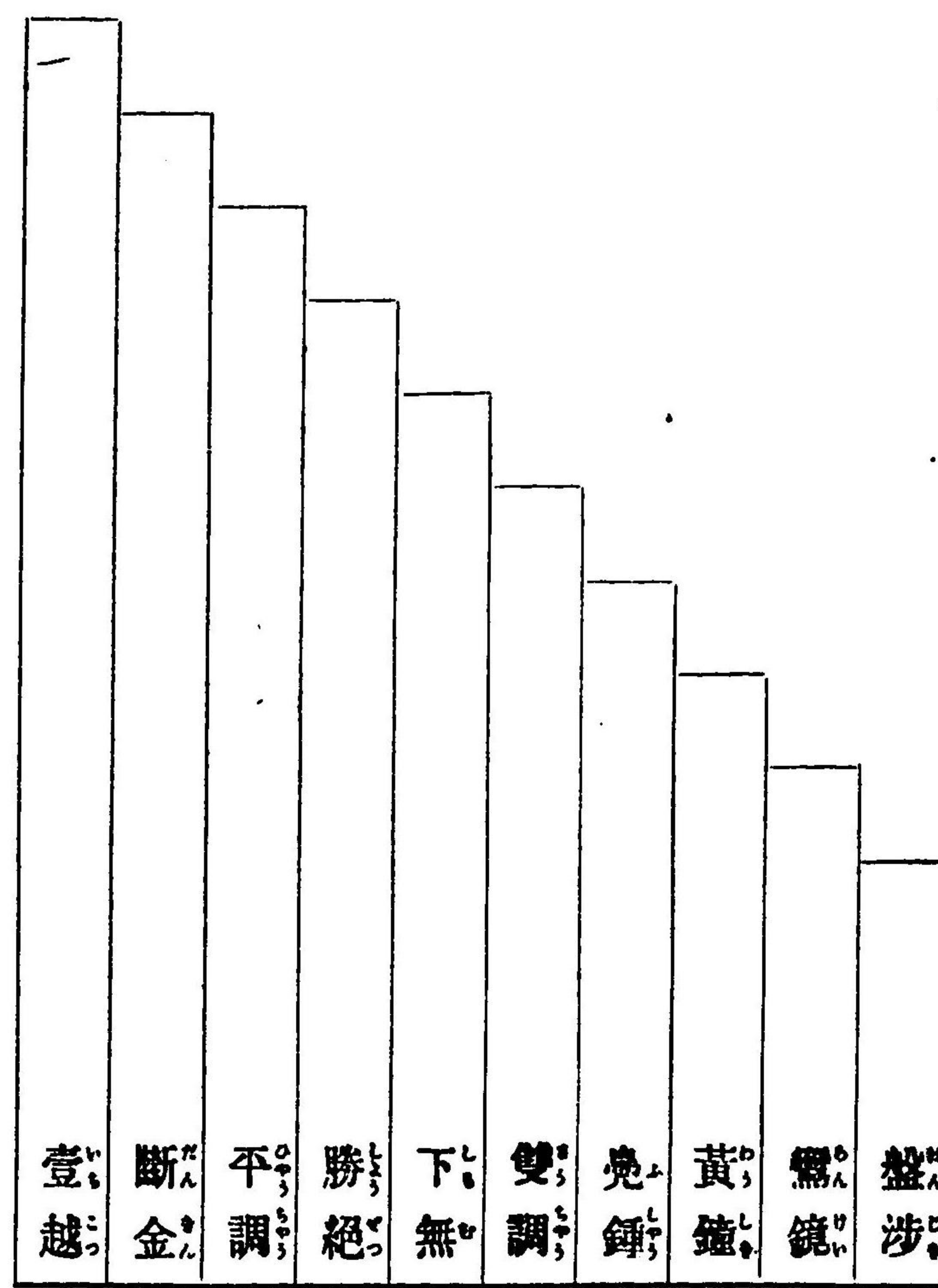
●左手法

押重 (チ) 強押 (カ) 掩放 (カ) 押響 (キ) 搖吟 (ユ) 重押 (チ) 強押 (カ) 掩放 (カ) 押響 (キ) 搖吟 (ユ)

平調子



これ古来より用ゐられたる「十二音圖」と稱するものにして壹越最も低く順次高く上無より上はまた壹越に歸る。毎調半音づきの差として、平調子の一を壹越と立つれば二は双調、三は黄鐘、四は鶯鐘、五は壹越、六は斷金、七は双調、八は黄鐘、九は鶯鐘、十は壹越、斗は斷金、爲は双調、巾は黄鐘、となる。即ち「一、五、十」「二、七、爲」「三、八、巾」「四、九」「六、斗」は同音階なりとす。



歌曲

第一 祝

第五

第六

○ 喚頭
 ○ 斗
 ○ 爲
 ○ 巾
 ○ 爲
 ○ 斗
 ○ 十
 ○ 九
 ○ 十
 ○ 斗
 ○ 爲
 ○ 斗
 ○ 十
 ○ 九
 ○ 八
 ○ 七

○ 打
 ○ 六
 ○ 七
 ○ 八
 ○ 七
 ○ 六
 ○ 五
 ○ 四
 ○ 三
 ○ 二

○ 喚頭
 ○ 二
 ○ 三
 ○ 四
 ○ 五
 ○ 六
 ○ 五
 ○ 四
 ○ 三
 ○ 二
 ○ 三
 ○ 四
 ○ 五
 ○ 六
 ○ 七
 ○ 八

○ 打
 ○ 八
 ○ 七
 ○ 六
 ○ 五
 ○ 四
 ○ 五
 ○ 六
 ○ 七
 ○ 八
 ○ 七
 ○ 六
 ○ 五
 ○ 四
 ○ 三
 ○ 二

○ 喚頭
 ○ 六
 ○ 七
 ○ 八
 ○ 七
 ○ 八
 ○ 九
 ○ 十
 ○ 九
 ○ 八
 ○ 七

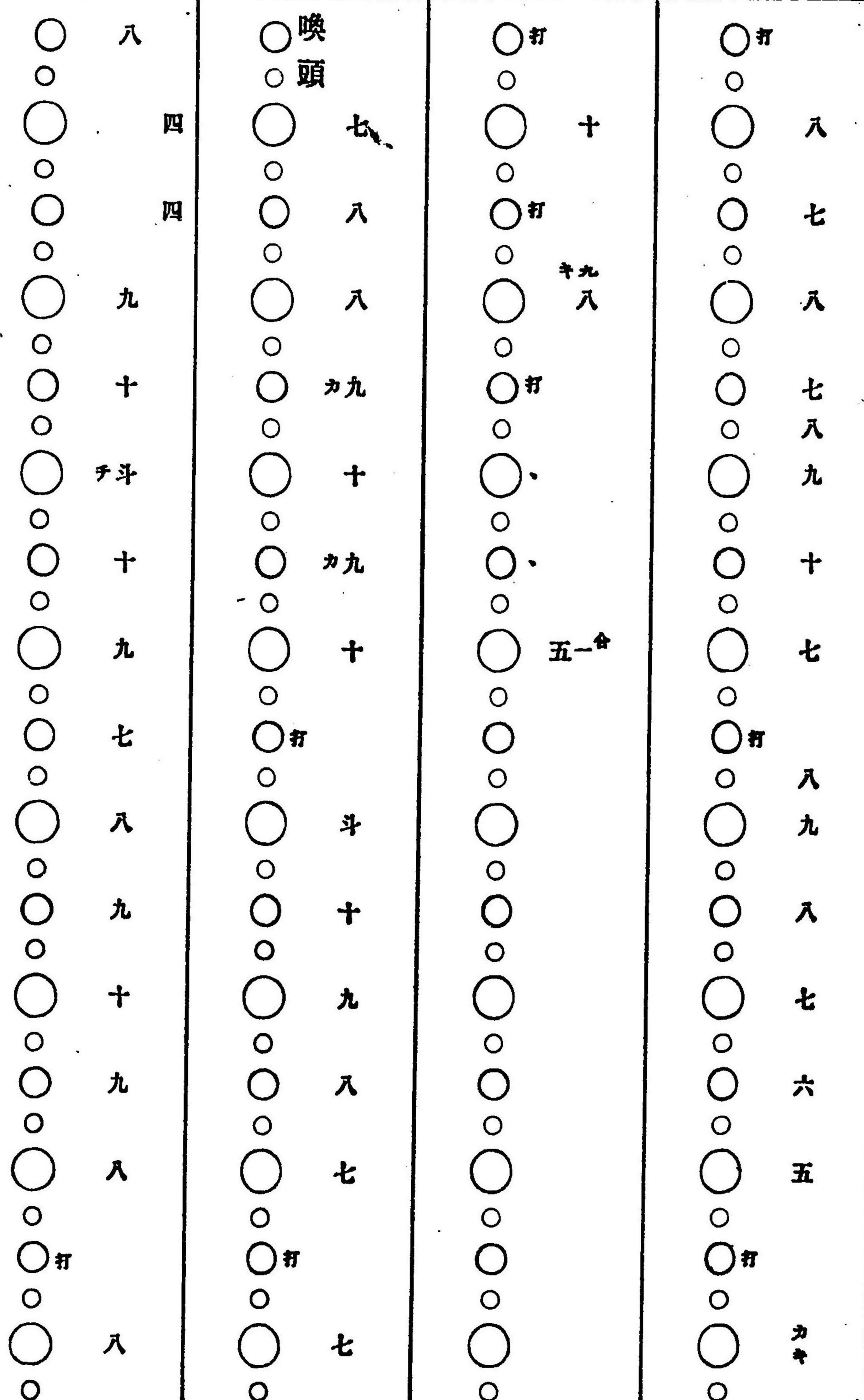
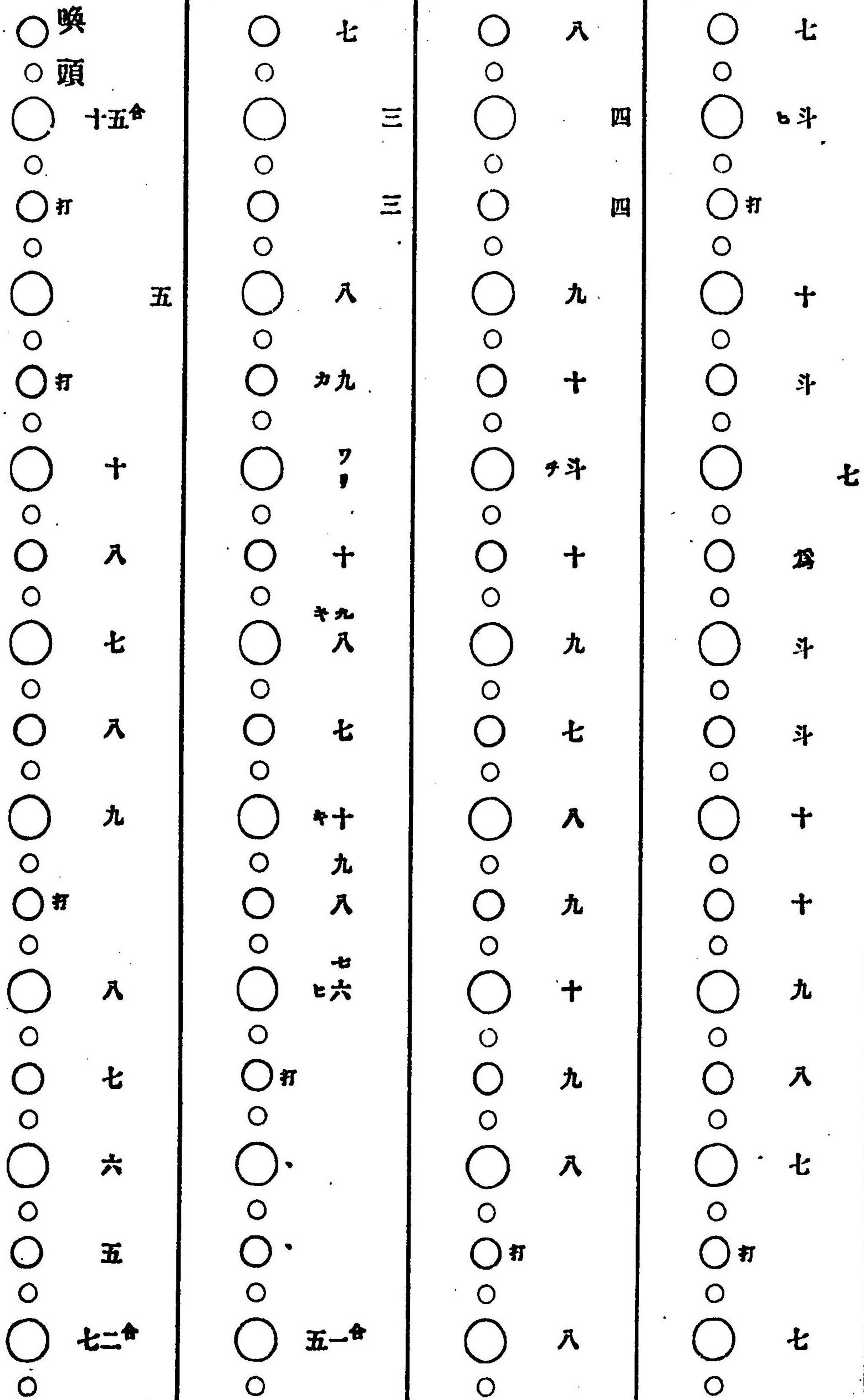
○ 打
 ○ 六
 ○ 七
 ○ 八
 ○ 七
 ○ 八
 ○ 九
 ○ 十
 ○ 斗
 ○ 十
 ○ 九
 ○ 八
 ○ 七

○ 打
 ○ 八
 ○ 七
 ○ 八
 ○ 九
 ○ 十
 ○ 九
 ○ 八
 ○ 七
 ○ 八
 ○ 九
 ○ 八
 ○ 七
 ○ 六
 ○ 五

○ 打
 ○ 六
 ○ 七
 ○ 八
 ○ 打
 ○ 五
 ○ 一
 ○ 二
 ○ 三
 ○ 四
 ○ 五
 ○ 六
 ○ 七
 ○ 八
 ○ 九
 ○ 十
 ○ 九
 ○ 八
 ○ 七
 ○ 六
 ○ 五

第七春

第六奥山深



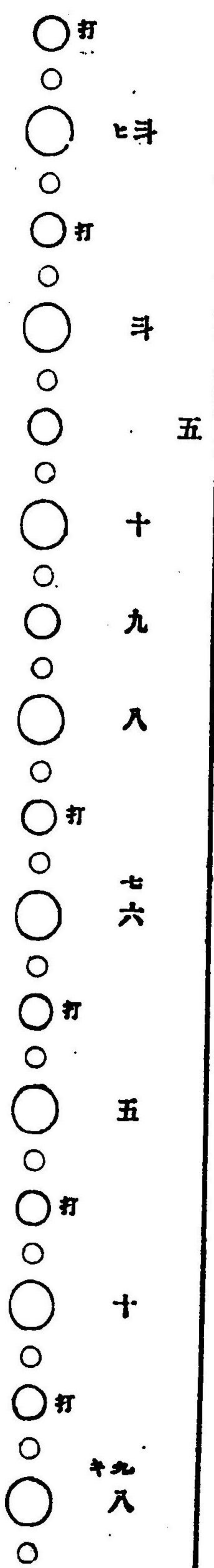
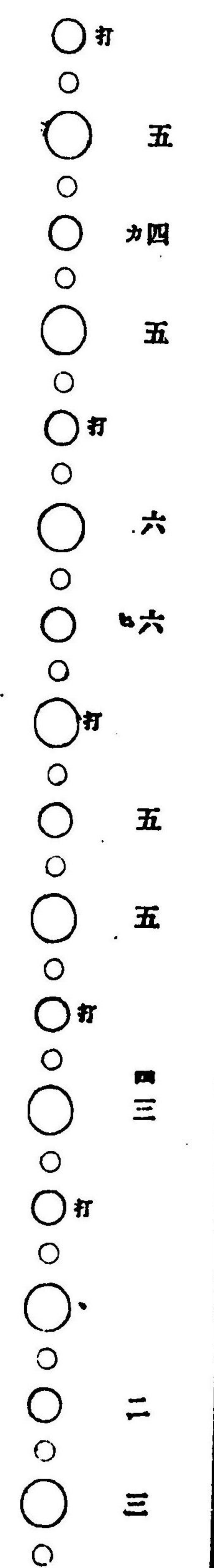
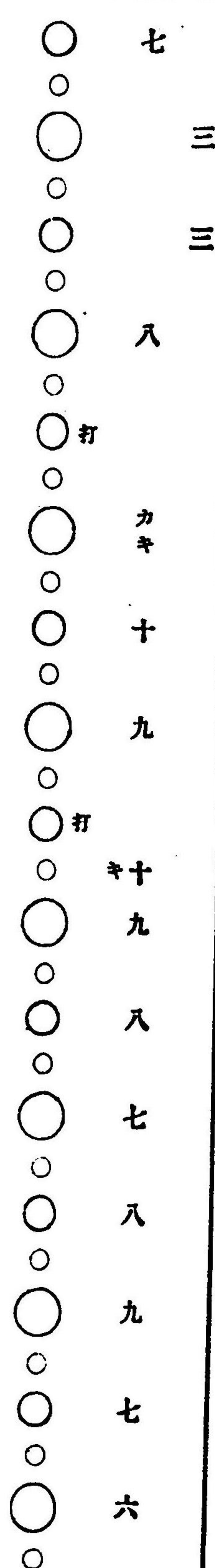
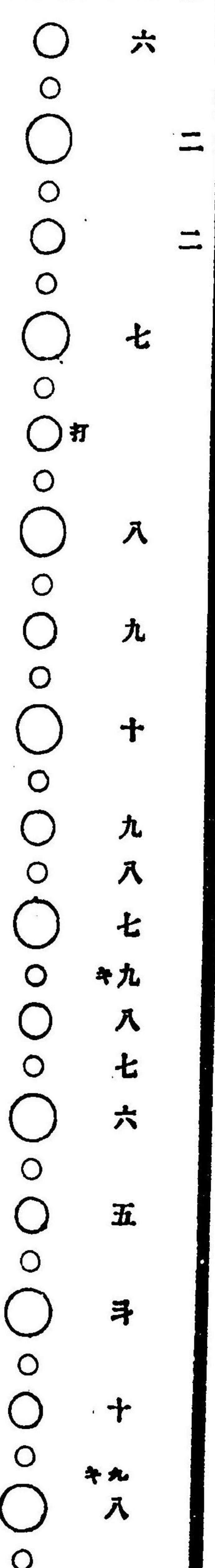
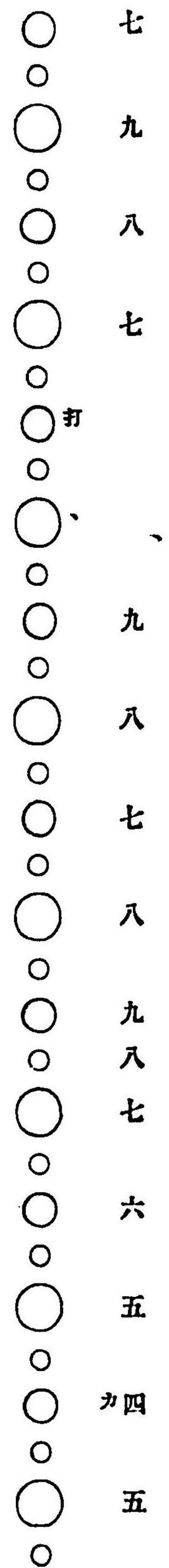
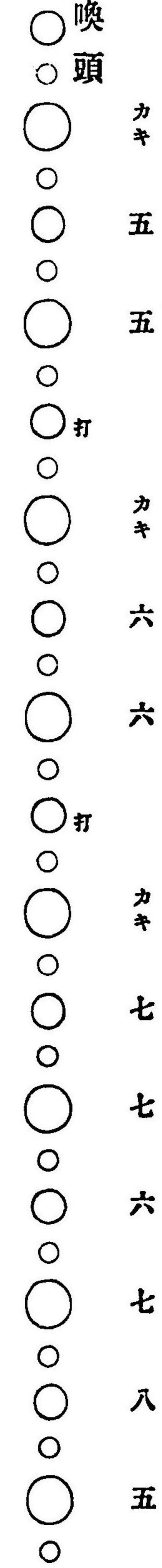
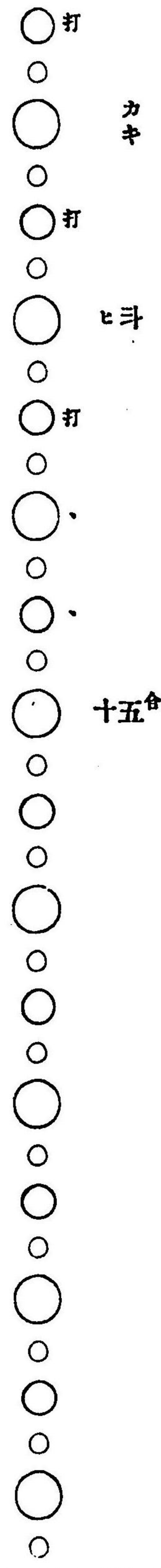
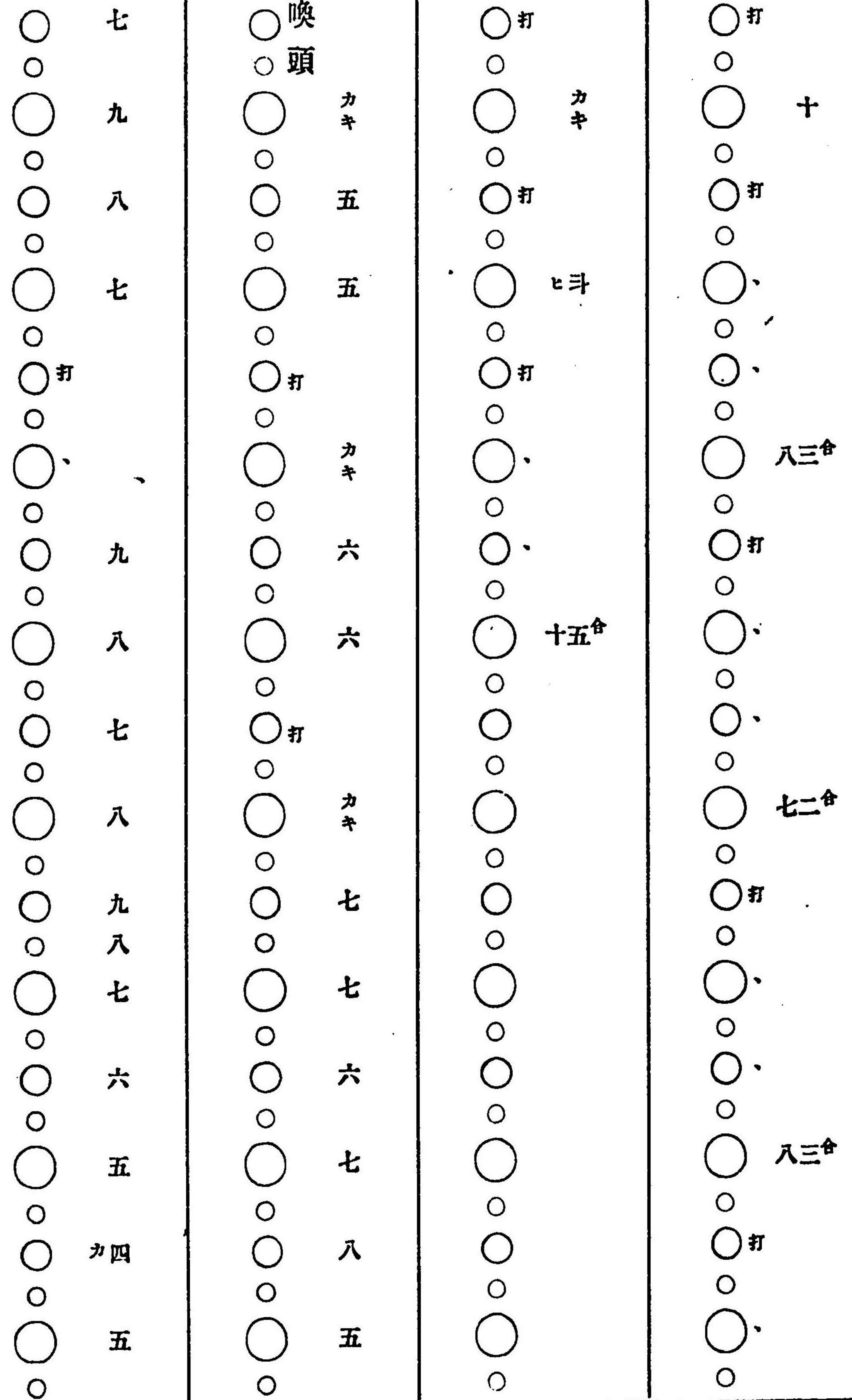
第八夏

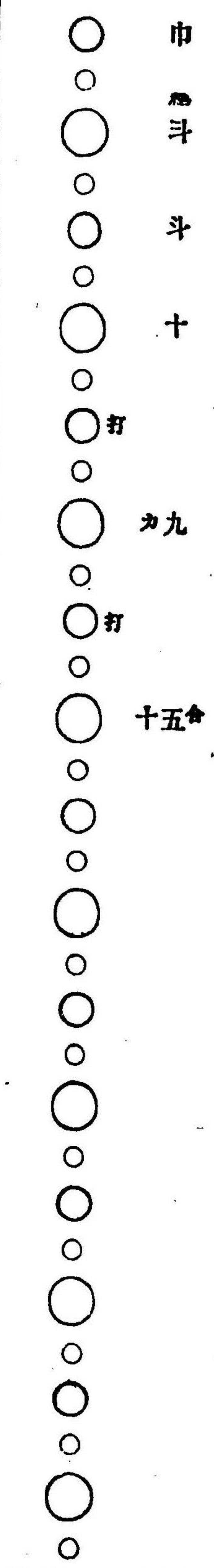
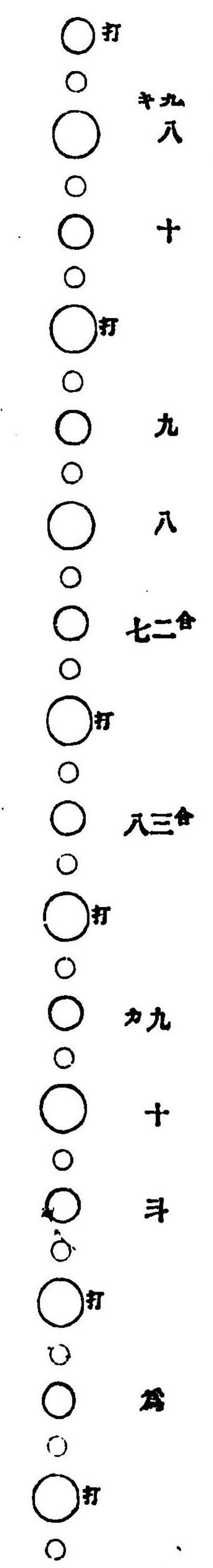
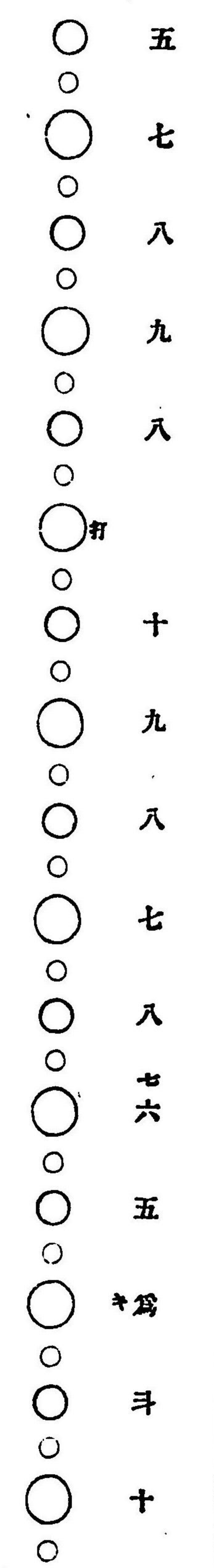
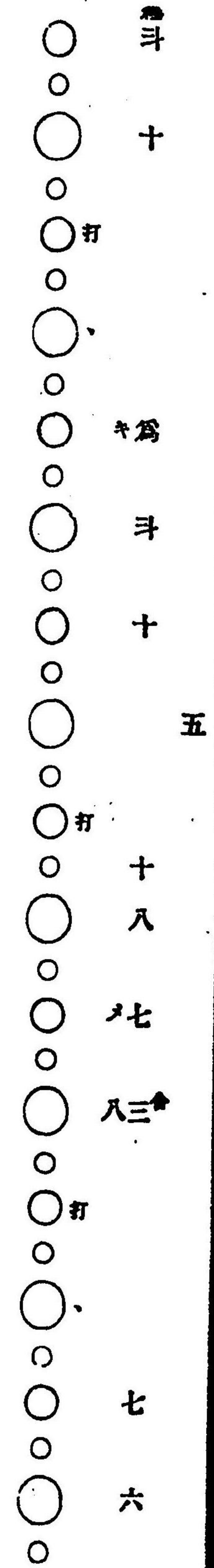
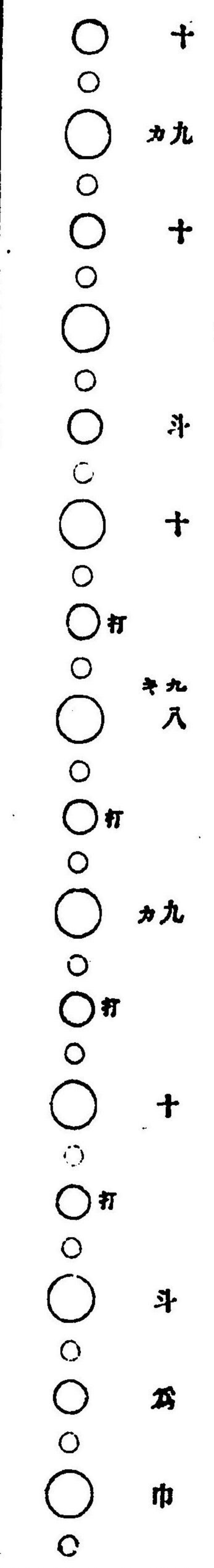
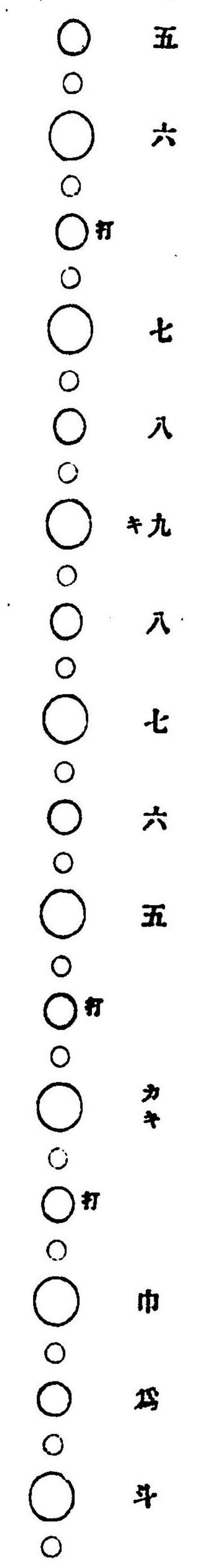
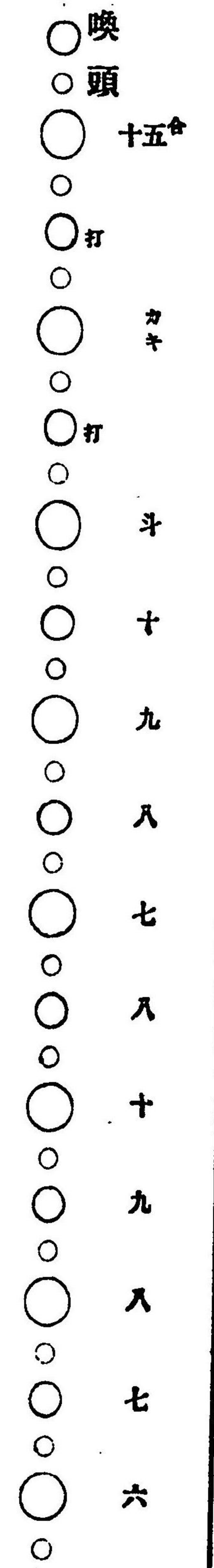
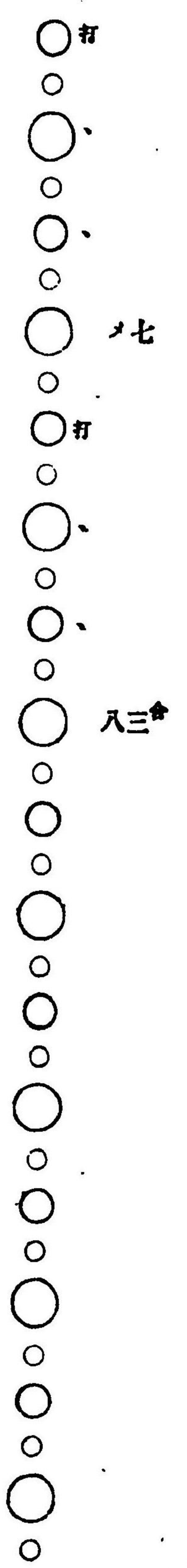
五 ヒ九 打 九 八 七 八 九 十 斗 十九 八 四 打 九	○喚頭 カキ 九 九 八 カキ 九 九 八 七 八 九 七 六 打 六	○打 レン 打 メ七 打 八三命	十 六 斗 十 打 キ九八 七 三 打 八 九 八 打 七 八
---	--	---------------------------------	---

○打 十 九 八 七 六 五 打 五 打 カキ 爲 巾 爲 斗 十 カ九	○打 八 カ九 十五命 打 五 五 十 斗 十九 八 打 七 八 九	○打 十 九 八 七 六 五 打 カ九 五 十 斗 十 打 キ九八 七	○打 八三命 打 九 八 九 七 八 打 十 斗 打 カ斗 十 九
--	--	--	---

七

第十冬





第十二
歌の道

○ 喚頭
○ カキ
○ 打
○ 十
○ 打
○ 五
○ 七
○ 八
○ 九
○ 打
○ 十
○ 打
○ 十
○ 九
○ 八
○ 七
○ 八
○ 打
○ 十
○ 九
○ 八
○ 七
○ 八

○ 七
○ 六
○ 五
○ 打
○ 七
○ 八
○ 九
○ 打
○ 四
○ 九
○ 打
○ 九
○ 三
○ 八

○ カ九
○ 十
○ 打
○ 斗
○ 十
○ カ九
○ 打
○ 十
○ 打
○ 斗
○ 爲
○ 巾
○ 斗
○ 十
○ 打
○ 巾

○ 十
○ 斗
○ 巾
○ 打
○ 巾
○ 八
○ 八
○ 巾
○ 打
○ 巾
○ 八
○ 巾
○ 打
○ 巾
○ 巾
○ 打
○ 巾

第十三
落梅

○ 爲
○ 斗
○ 打
○ 巾
○ 巾
○ 爲
○ 斗
○ 十
○ 打
○ 斗
○ 十
○ 打
○ 斗
○ 十
○ 打
○ 十
○ 八
○ 七
○ 打
○ 九
○ 八

○ 打
○ カ九
○ 十
○ 斗
○ 爲
○ 十
○ 打
○ 九
○ 八
○ 四
○ 打
○ 九
○ 十
○ 八
○ 七

○ 打
○ 八
○ 打
○ カ九
○ 十
○ 爲
○ 斗
○ 十
○ 打
○ カ九
○ 打
○ 十五
○ 打
○ 十五

○ 喚頭
○ 爲
○ 打
○ 斗
○ 打
○ 十五
○ 打
○ 斗
○ 打
○ 斗
○ 十
○ 斗

三
七
八
九
七
六
五
カ
四
五
二
二
七
八

七
三
八
打
キ
十
ヒ
九
打
九
八
七
八
九
七
六
打
五

カ
四
五
打
六
七
八
一
五
打
四
三
打
六
七
三
八

七
六
五
キ
九
八
七
六
打
五
打
八
メ
七
打
七
八
七
六

打
カ
キ
八
七
八
ス
リ
ス
リ
打
八

七
三
八
七
八
七
六
打
七
六
六
七
八
七
六

五
六
キ
七
六
打
五
七
八
ヒ
九
打
八
七
八
カ
九
十

打
九
八
打
七
六
七
八
九
八
七
八
七
六
五
カ
キ

第十五季の花

九
九
八
七
六
六
七
八
九
八
七
*十九
八
七
六
五

打
カ四
打
五一合

喚頭
八三合
打
九
八
七
六
五
打
七
八
九
打
九
九

打
四
九
打
八
メ七
カキ
打
十
九
八
打
七
六
打

五
打
ヒ五
打
一
五
四三
五三

カ四
五
八
七
六
一
五
四三
五三
カ四
五
八
七
六
一
五
四三
五三

カ四
カキ
五
ワリ
六
五
カキ
メ七
打
七八
カ九
十
五
打
九
八
七八

カ九
十
カキ
ヒ斗
五
十
打
九
八
七八
カ九
十
カキ
ヒ斗
五
十
打
九
八
七八

第十六 相生

カ九
カキ
十
ワリ
斗
十
ワリ
爲
ワリ
巾
爲
斗
爲
斗
ワリ
巾
爲
斗
爲
斗
ワリ
爲
ワリ
巾
爲

斗
爲
斗
ワリ
爲
ワリ
巾
ワリ
爲
巾
爲
斗
十
九
八
七
八
九
カ
カキ

十
ワリ
斗
十
ワリ
爲
巾
爲
斗
十
九
八
七
八
九
カ
十
八
十八

七八
キ十九
八
七
六
一
五
四
三
カキ

打
六
七
八
打
九
七
六
六
打
七
六
五
打
四
三
打
ワ

打
十
九
三
打
八
七
六
五
打
四
五
一
合

喚
頭
八三合
打
レ
ン
ヒ
六
一
打
五
打
六
打
六
打
六
打
六
三
三
八

打
五
チ
六
打
チ
六
二
打
七
打
二
二
七
打
八
三
合
打
三
三
八

第十七
手習

○喚頭
○頭
○七六
○打
○七
○八
○カ九
○カキ
○打
○十
○打
○キ九八
○打
○八三合

○打
○二
○二
○七
○打
○七
○九
○打
○九
○八
○打
○カ九
○十
○斗
○打
○五

○十
○斗
○十
○斗
○打
○キ爲
○打
○巾八合
○打
○引
○打
○連
○打
○チ巾
○打
○チ巾

○巾
○爲
○斗
○斗
○打
○巾
○爲
○斗
○五
○カ九
○十
○打
○キ九八
○打
○カ九
○十
○斗
○ヒ斗

○打
○十五合
○打
○十
○メ七
○八
○打
○キ七六
○打
○一
○打
○五
○打
○カキ
○巾
○巾

○打
○カキ
○十
○ヒ十
○打
○十
○キ九八
○七
○八
○キ十九八
○キ七六
○五
○打
○五
○チ六
○七二合

○打
○カキ
○十
○打
○五
○五
○打
○十
○打
○チハ巾
○メ爲
○打
○ヒコハ
○ヒ斗
○打
○十五合

○打
○引
○連
○レ
○ン
○八
○キ七
○打
○八
○キ七六
○五

第三、櫻。

櫻、櫻、彌生の空は、見渡すかぎり。
霞か、雲か。にほひぞ出づる。

いざや。見にゆかむ。

第四、花くらべ。

梅の白妙、さくらのにほひ。

桃のうすいろ、こさませて。

春のあや織る、いざやなき。

第五、勤め。

勤め、つとめ。わがなすわざを。

勵め、はげめ。ひびおこたるあ。

富めよ、富ませよ。日本の民。

第六、深山の奥。

み山の奥は、春ながら。

木梢の雪は、消えやらず。

溪の流れも、うすごほり。

おかれて開く、梅さくら。

第七、春。

春に梅咲く、月か瀬は、

谷も山邊も、花みちて、

匂ひ香ばし、吹く風に、
きなく黄鸝、聲やさし。

第八、夏。

夏はくさ木も、若葉して、
澤に咲きぬる、花あやめ、
庭の卯のはな、雪と見む、
空になのれる、はとこぎす。

第九、秋。

秋の千草の、野邊に咲く、
尾ばな苳、をみなへし、

萩につき草、ふちはかま、
すだく蟲の音、あはれなり。

第十、冬。

冬のあしたに、つもる雪、
そのも山路も、一つらに、
玉しつかねを、しくごこく、
常にまさりし、けしきなり。

第十一、螢。

清き流のいさら川、袂すすしき夕ぐれに、
螢ごぶなり、イチャをさな子、

とりて集めて、よもすがら、
窓の光りよ、書を見よ。

第十二、歌の道。

鶯も、蛙もうたふ、歌の道。

月、雪、花のをりくは。

心うらくに、うたへ、たのしめ。

第十三、落梅。

年たちかへる春の空、垣根の草は色づきて、柳のいと
もうちけぶり、かをりもゆかし梅の花。折もをりとして
笛の音の、雲にひびける心地して、

花もちるなり、花もちるなり、笛のねの。

第十四、弓八幡。

松たかき、枝もつらなる鳩の峰、曇らぬ御代は久方の、
月の桂の男山、げにもさやけき影にきて、君萬歳と祈
るなる、神に歩みをはこぶなり、神に歩みをはこぶな
り。

第十五、四季の花。

春は花、夏はたちばな、秋は菊。

冬は水仙、むろ咲の梅。

第十六、相生。

相生の、をしほの山の小松原。

今より千代の、かけをまたなむ。

第十七、手習。

手習ふちごよ、難波津に、咲くやこの花冬ごもり、今を
春へと文字の花、書の本にかをらせて見よ。

第十八、松風。

箏の音に、峰の松風かよふし。
いづれの緒より、調べそめけむ。

明治卅九年六月八日印刷
全 六月拾四日發行

非賣品

編輯 兼 行人

岡山縣岡山市内山下六十八番地
太宰勝之都

印刷人

岡山縣岡山市野田屋町百四十八番地
川上幸太郎

印刷所

岡山縣岡山市野田屋町百四十八番地
川上印刷所

24
175

